四日市公害と「四日市学」

下記は今から２年前の「四日市公害/判決から 30 年」という特集記事の一つである。そのなかで淡路剛久教授は「維持可能でなかった四日市型の開発を転換し、維持可能な発展にどうつなげていくのか。コンビナートの縮小に直面しているいまの苦境は、考えようによってはまたとないチャンスといえるのではなかろうか」と結んでいる。

21 世紀は「環境の世紀」といわれるが、日本の現実を直視すると、それに逆行する動きも目立つ。超高層ビルの建設ラッシュなど、経済効率優先の開発が依然すすめられている。

四日市公害 判決から30年 ―下

淡路 剛久

後退する都市政策 地域から環境再生を

かつて大気汚染で深刻な被害をもたらした四日市コンビナート。あれから30年……本社ヘリ「おかつる」から

いま一度、私たちは過去の公害問題から、教訓と課題を学ぶ必要がある。四日市公害を記録する会の沢井余志郎代表は、「過去の負の歴史から学ぶために、半永久的な資料の保存・活用が大切」と話す。

大阪の西淀川や川崎などの公害地域の住民が始めた「環境再生」の街づくりは、過去から現在、未来に向けた注目される動きだ。

朝日新聞

共に守る 公害の記憶

西淀川・名古屋南部…各地に連携呼びかけ

四日市公害を記録する会

整理された四日市公害資料を眺める沢井余志郎代表

先日の NHK「東海ナビゲーション」で、三重大学人文学部の「四日市学」の講義が紹介されていた。原告患者の方たちが、多くの学生の前で公害について講義するものだ。

このビデオを見た学生の感想は、原告患者の率直な「語り」がとりわけ印象的なようであった。わが人文社会学部においても、「○○学」といった講義、地道に歩んでこられた人たちの生の「語り」が聞ける講義をさらに充実させていきたいものだ。

（7 月 2 日　記）